

学術

「余白」への書き込みは続いていた

初期の限界を克服していくマルクスの姿勢

浅川雅己

ケヴィン・B・アンダーソン 著
平子友長 監訳
明石英人・佐々木隆治・斎藤幸平・隅田聡一郎 訳
▶周縁のマルクス
ナショナリズム、エスニシティおよび非西洋社会について
2・20刊 A5判438頁 本体4200円
社会評論社



著者のアンダーソン氏が本書の執筆にあたって利用した資料の中で特に重要なものが二つある。一つは、Marx Engels Collected Works (MECW) 所収の新聞寄稿論文、とりわけ『トリビューン』に寄稿された英語論文である。もう一つは、マルクスが晩年1879〜1882年にかけて作成した一連の抜粋ノートである。これらのノートは、新MEGAの刊行計画の対象とはなっているものの三分の一強が刊行されずにすまない。

それは、部分的にはすでに刊行されていたが、まさに部分的に必要に応じて利用されてきただけで、マルクスの理論体系の中でそれが占める地位、果たした役割についてはほとんど関心が払われてこなかった。これらの資料は総じて、まさにマルクスの理論的営為の「余白」(margin)とみなされてきたのである。例えば、それは、本書の「補遺」で紹介されているリャザノフの言葉に示されている。マルクスが多くの抜粋ノートを作成したことについて「多くの時間を無駄にする『弁明の余地のない学者ぶったるま』であり、この時期『マルクスは集中的かつ自立的で知的な創造活動を行う能力を失っていた』というのである。

しかし、アンダーソン氏によれば、このような考え方は正しいものではない。今日我々が知っている——と信じている——「マルクス主義」は、スターリン批判後のものも含めて、そのほとんどが、マルクス自身にとって過去のものとなりつつあった見解に依拠したものにすぎないことを本書は指摘している。

例えば、『階級還元論』による民族問題の軽視という、マルクス主義への批判は、アメリカ南北戦争やアイルランド問題に関するマルクス自身の理論的彫琢の過程をたどれば、少なくとも1870年代以降のマルクスには、そのままで適用できない。また、『共産党宣言』に色濃く表れている「資本の文明化作用」の結果としてのプロレタリアートの普遍的・必然的出現という展望や、西欧の発展に他の諸地域も続くという単線的な歴史的發展論が、遅くともフランス語版資本論において修正され、『祖国雑記』やサスリチへの手紙が書かれたころにはほとんど克服されている。

私見によれば、本書の最も重要な貢献は、そのようなマルクスの到達点を示したことよりも、『共産党宣言』などに見られる初期の見解との相違を明らかにしたこと、そしてそれ以上に、マルクス自身が初期の限界を克服していくプロセスを丹念なテキストクリティックを通じて明らかにしたことにある。本書において

我々が見出すべきものは「現実を揚棄する現実の運動」の中で、自己のそれまでの理論的見解をも揚棄すべき「現実」の一部として捉え直すことでマルクスの姿勢である。

しかし、本書の提起する問題は、そのようなマルクス自身の理論形成過程の諸問題にとどまらない。本書は、ジェンダーやエスニシティ、それから巻き込んだ、グローバルな政治的、文化的、社会的、経済的秩序の形成と発展の問題についての先行研究の一つとして、マルクスの理論的営為を取り上げることによって、今日最もアクチュアルな問題領域にもインパクトを与えるものとなっている。それは、今日のグローバル化、シモンをどうとらえるかという問題に、また、そうした観点から再度関心呼びつづける、日本資本主義論争、移行論争など、構成体や生産様式

の交代・移行をめぐる議論や「現存社会主義」の性格規定の問題、さらにはジェンダー、エスニシティの研究にも及ぶであろう。

ここで、一つだけ論点を提起したい。プロレタリアートの普遍的・必然的出現という展望は、マルクス自身によつて斥けられるに至ったという本書の指摘を、評者も支持する。しかし、それが斥けられなければならない理由については、本書の考察は必ずしも十分ではないと思われる。というのも本書においては、プロレタリアートの普遍的・必然的出現の展望自体が想像の産物にすぎなかったのか、あるいは、そのような状況を推し進めるような要因が、一時期ある条件のもとで実在していたのかという点が十分に検討されていないように見えるからである。仮に普遍的な要因が存在していたとすれば、そうした要因は、今日完全に消失したのか、それとも要因自体は存続しているが何らかの対抗力によってその効果が抑制されているのか、という問題も検討されるべきだろう。

最後に翻訳であるが、正確さと読みやすさの両立に多大な努力が払われており、アンダーソン氏の慎重で堅実な研究にふさわしい訳業である。訳者諸氏が監訳者を中心にMEGA編集に直接、間接に貢献してきた成果が活かされているというところだろう。(札幌学院大学経済学部准教授・マルクス経済学)

思想

パラダイムの消滅する場所、そして多様な可能性を胚胎する場所

差異を差異のままに活かせば差別を無意味なものとするような、「多元的共生」の道が現れる

堀内正樹

中国古

詩跡の空間的・時間的経過を

松尾幸忠

田村愛理・川名隆史・内田日出海 編
▶国家の周縁
特権・ネットワーク・共生の比較社会史
3・26刊 A5判360頁 本体4500円
刀水書房

